

## 父に届くような酪農を目指して

日本獣医生命科学大学 応用生命科学部 動物科学科 3年 富岡 来夏

私は、新規就農者として酪農を営むため日々学習に励んでいます。非農家出身である私が酪農家を目指したのは、小学生の時に受けた授業がきっかけでした。当時の担任の先生は、某有名チェーン店のハンバーガーを用いて、我が国の食料自給率についてお話してくださいました。先生は、ハンバーガーの各具材を100とし、日本の食料自給率に換算した量に切り分け、「日本産の農作物はこんなに少ないんだよ。」と視覚的な情報として、私たちに食料自給率の重要性について講義してくださいました。この授業での経験は、その後の私の人生を大きく変えてしまうほど、強い衝撃を受けたものでした。

それから10年が経ち、高校3年生の進路選択の際には、日本の食料自給向上に貢献できるような職に就くための学習をしたいと考えていました。動物も好きだった私は、食の根幹である酪農について学ぶことのできる大学への進学を決意していました。しかし、私は家族からあまり良い返事をもらうことは出来ませんでした。なぜなら私達家族には、農業を営む身近な人がおらず、酪農がどのようなものなのか想像することすら難しかったのです。それ以前に、両親は私が飽き性であることをよく分かっていました。反対を押しつけ、大学入学が決まった際、最初は喜んでくれた父でしたが、「酪農を学んでお前の人生にどう役に立つのか?」と言われてしまうほどでした。この言葉は、私に大きなショックをもたらしました。言い返したくても反論に足る自らの意思を述べることができなかったのです。自分が進もうとしている酪農への道が本当に正しいのか、既に決定した進路選択に疑問を持たざるを得なくなってしまいました。

大学に入学してから1ヶ月が過ぎた頃、私は日本獣医生命科学大学で念願だった畜産についての学習を始め、何事にも積極的に取り組んでいました。しかし、大学進学を機に離れて暮らし始めたにも関わらず、不意に父の問を思い出しては、自分のような人間が酪農についてしっかりと学べるだろうか、寄せては返す波のように大きな不安が度々私を襲いました。そんな中、北海道で開催される新規就農セミナーの参加案内を目にしました。非常に魅力を感じながらも、畜産について学び始めたばかりの私は、参加することに躊躇していました。酪農のことを何も知らない自分が、そんなセミナーに参加しても良いのだろうか。しかし、酪農の現場についてより詳しく知りたいという気持ちが強まり、この機会を逃しては後悔すると考え、参加を決意したのです。

北海道西興部村で開催されたセミナーは、畜産に関心のある学生や、酪農に携わる大人の方々から勉強させていただくことも多く、畜産についての知識が乏しい私にとって、非常に充実したものでした。中でも、猿払村で酪農を営む小泉さんが包み隠さず、酪農の現状についてお話してくださいました。小泉さんの言葉からは、酪農の厳しさだけでなく、やりがいや喜びも伝わってきました。酪農に対する真剣な姿勢や情熱に触れた私は、小泉さんからのお話をきっかけに、酪農への興味がより一層増していくのを感じました。

それから1年経った大学2年生の4月、酪農についてより詳しい学習を行いたいと考えた私

は、新規就農セミナーで大変お世話になった小泉さんに連絡を取り、実習を受け入れていただけないかお願いしたのです。小泉さんは快く承諾してくださり、自分が酪農について真剣に取り組む機会をいただけたことが本当に嬉しくてたまりませんでした。

私は、実習が決まったことを、離れて暮らす父に報告しました。今思えば、父に対して自分の決意を示したかったのかもしれない。

私の飽きっぽい性格をよく知る父は、「いつまでその決意が続くかな」と試すような目をしながらも、どこか真剣な口調で問いかけてきました。以前の私ならこの問いに対して、黙り込んでしまっていたのかもしれない。しかし、2年間の大学生活により少しか自信をもって私は、「これからの成長を楽しみにしている」と、言葉を返すことができたのです。父はそんな私に驚きつつも、「お前の好きなようにやればいいさ」と言っていたことを私は鮮明に覚えています。

この会話を最後に、二度と父と会話することができなくなってしまうなんて思いもしませんでした。大学生活を通して成長した自分の姿を父に見せることで、酪農の道に進んだ一人娘を誇りに思っていた。大きな心残りを抱えながらも、私は父が残した最後の言葉を胸に、自分を信じて北海道猿払村へと発ちました。

小泉牧場での実習は父の死から気弱になっていた自分にとって、大きな正念場であり、日々を全力で励みました。時に厳しく、そして真剣に私に向き合ってくださったにも関わらず成長しきれていない自分に歯痒さを感じながら、酪農に関してだけでなく、自分自身の弱さについても、非常に勉強させていただいた日々を過ごしました。実習終了が目前に迫った6日目の朝、酪農に本気で取り組むことの厳しさに直面した私は、自信を失いかけていました。そんな中、私は母から送信された一枚の写真を目にしました。それは、畜産を主題にしたコミックスシリーズ全巻が、亡くなった父の本棚に並べられている様子を写したものでした。農業について全く興味がなかった筈の父が、このようなコミックを持っていたことも驚きでしたが、私を理解するため、父が努力をしていたことが何よりも嬉しかったのです。酪農を語る私の姿を前に、父が強い言葉で問いかけ続けていたのは、私が自分の選択について真剣に考え、行動しているかを確認するためだったのかもしれない。真意を確認することは叶いませんが、この写真により、俄然意欲的になった私は、残りの実習も全力で取り組むことができました。

父を亡くし、何もかも後ろ向きな考え方だった気弱な私に対し、懸命な指導をくださった小泉さんには感謝してもきれません。猿払村での実習を通して、私は明確な将来の目標を得ました。それは、亡き父に届くような酪農経営を行うというものです。

酪農を取り巻く情勢は厳しく、新規就農を目指す中で、時には辛いこともあるでしょう。しかし、荒波は、私自身を成長させ、父を見返すことのできるような素晴らしい酪農経営を可能にすると信じています。

これからの道のりは決して平坦ではないですが、私は自分の選択を信じ、酪農について学び続け、生業とする決意をしました。これから学ぶ全ての事柄が、私の人生に与える影響を深く理解し、成長し続ける姿を父に見せられるよう、努力していくことを誓います。